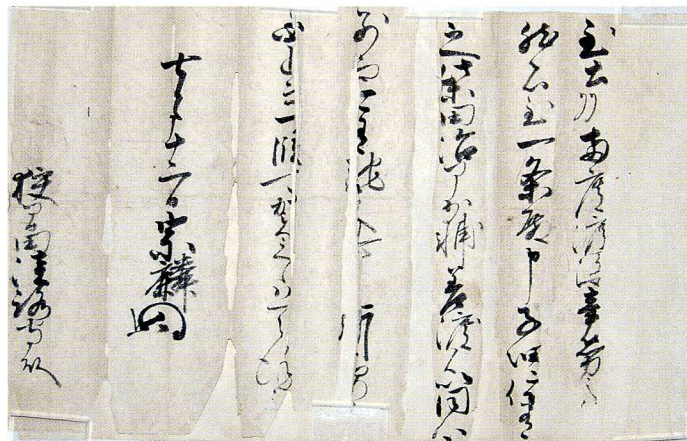


狭間田文書(はさまだもんじょ)

戦国時代後半に、大分郡高田荘(大分市)に拠点を置いていた大友氏の家臣狭間田氏に大友宗麟やその長男義統から出された書状など14点からなる古文書群です。内訳は宗麟関係4点、義統関係9点、その他1点です。高田荘に関する3点は『豊後国荘園公領史料集成 五(下)』で紹介されていましたが、残る11点はこれまで紹介されていない新出の史料です。

注目されるのは、狭間田氏が大友氏の水軍衆であったことを示す史料です。例えば、内容から元龜3年(1572)と推定できる大友宗麟書状では、狭間田淡路守が土佐(高知県)に2度渡海していることが記されています。さらに、天正6年(1578)の日向(宮崎県)土持氏攻めでの大友義統感状では、狭間田淡路守が兵船奉行として、土持氏が支配していた海岸線を攻略する軍功をあげていたことがわかります。

これまで、大友氏水軍といえば、佐賀関(大分市)の若林氏や速見郡真那井(日出町)の渡辺氏が有名でしたが、この狭間田文書により、別府湾北岸にも大友氏直属の水軍衆がいたことが明らかとなりました。



(元龜3年)7月12日付 大友宗麟書状 狭間田淡路守宛

利用案内

- 開館時間 9時から17時(入館は16時30分まで)
- 休館日 第1月曜日の翌火曜日と第2～5月曜日(祝日の場合は開館)
祝日の翌日(土・日曜の場合は開館)
年末年始(12月28日～1月4日)
- 観覧料 大人200円(団体150円) 高校生100円(団体50円)
※団体は20名以上、小中学生は無料
※特別展開催中は別料金となる場合があります。
※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方とその介護者は無料。受付で手帳を提示してください。
- 住所 〒870-0864 大分市大字国分960-1 TEL097-549-0880
- 交通機関 JR久大本線 豊後国分駅下車
大分バス 国分新町ゆき 歴史資料館入口下車
大分自動車道 大分IC、光吉ICからともに約15分

昔のおもちゃで遊ぼう

- 内容 歴史資料館隣の広い史跡公園で、竹馬、竹とんぼ、水でっぽうやコマなど手作りの昔のおもちゃで、思い切り遊びます。
- 日時 5月5日(こどもの日) 9時～16時
- 場所 歴史資料館隣の豊後国分寺跡史跡公園
- 参加費 無料
- 申し込み 事前申込の必要はありません。

七夕飾りを作ろう

- 内容 短冊に願いごとを書いて、みんなで七夕飾りを作っていきます。
- 日時 7月5日(土) 9時～16時
- 講師 歴史資料館
- 参加費 無料
- 申し込み 事前申込の必要はありません。

ふれあい歴史体験講座

- 実施日 5月31日(土) 管玉・丸玉作り
6月14日(土) 土偶作り(午前のみ)
6月28日(土) 勾玉作り
7月12日(土) 縄文かご編み(午前のみ)
- 時間 9時30分～/14時～(各回約2時間)
- 参加費 管玉・丸玉 3個セット 260円
土偶 1個 170円
勾玉 1個 200円
縄文かご編み 1個 300円
- 定員 各回70名(ともに先着順)
- 申し込み 電話でお申し込みください。
受付開始日は市報などでお知らせします。

テーマ展解説講座

- 実施日 講座室でテーマ展「江戸時代の技術と科学」についてスライドなどで解説したのち、展示室をご案内します。
- 日時 4月27日(日) 14時～15時30分
- 講師 歴史資料館講師
- 参加費 展示をご覧になる場合は観覧料が必要です。

ミュージアム・シアター

- 実施日 4月27日(日) 文字の普及一近世の技術と生活
筑紫の磐井(アニメ)
- 5月25日(日) 謎の絵師 賀来飛霞 本草学の大家
まんが日本昔ばなし
「養老の滝」
「雀とキツツキと山鳩」
- 6月22日(日) 化政文化
まんが日本昔ばなし
「こがねの斧」・「蛙の恩返し」
- 時間 13時～14時
- 料金 無料
- 申し込み 不要

大分市歴史資料館

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

ニュース

vol.
83
2008.4.19

大分市歴史資料館 テーマ展示 I

江戸の技術と科学

4月19日(土)～7月13日(日)

発行日：平成20年4月19日

発行：大分市歴史資料館 〒870-0864 大分市大字国分960-1 ☎097-549-0880

※ホームページ <http://www.city.oita.oita.jp/> (大分市ホームページ)の「施設ガイド」も併せてご覧ください。

江戸の技術と科学

会期：平成20年4月19日(土)～7月13日(日)

16世紀半ば、日本に来日したポルトガル人やイエズス会の宣教師らによって鉄砲をはじめとする西洋の進んだ科学技術がわが国にもたらされました。また、この頃ヨーロッパで盛んに用いられたオルテリウスなどの地図も伝えられ、日本人に新しい世界観を与えました。

江戸時代に入り、幕府が行った基督教の禁止令と鎖国政策によってポルトガルなどの諸外国との交易は断たれ、長崎を窓口にオランダ・中国とのみ貿易が行われることになりました。以後、オランダや中国との貿易で得た文物や、中国の朱子学やオランダ語を介した蘭学の影響を受けながら、日本の科学技術は、医学や本草学などの分野、また殖産興業に関わって独自の展開をみせていきました。

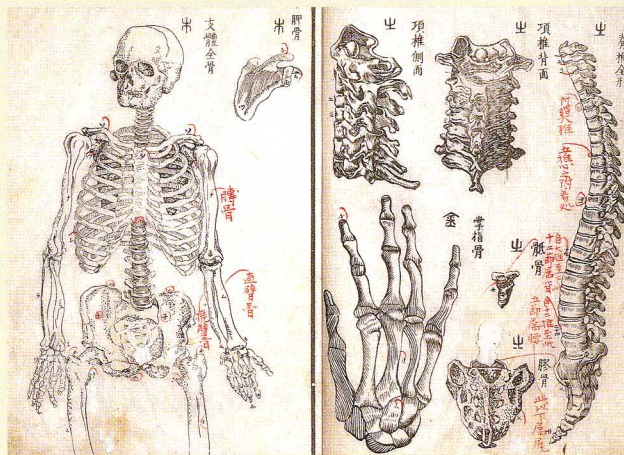
本テーマ展では、書物や絵画・民俗資料などを通して、江戸時代の人々の技術や科学の様相を紹介します。

近代医学と蘭学のあけぼの

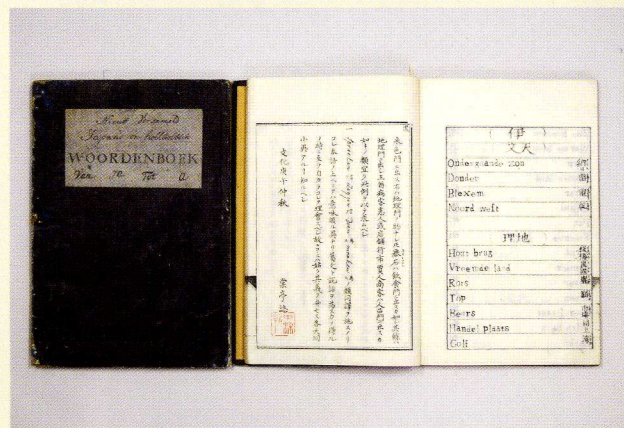
8代将軍徳川吉宗は、殖産興業政策をすすめるために実学（実用の学問）を重視し、基督教に関係のない漢訳洋書の禁をゆるめ、オランダ語の学習を認めるなど、西洋の科学知識や技術の導入をはかりました。やがて、明和8年(1771)、江戸の千住小塚原で行われた腑分け（人体解剖）を見学した杉田玄白・前野良沢ら蘭方医たちは、持参した蘭書『ターヘル・アナトミア』の解剖図と目の前の内臓や骨格を見比べて蘭書の正確さに驚きました。同書の必要性を実感した玄白らは、翻訳作業を行い、3年後の安永3年(1774)に『解体新書』の名前で出版しました。同書の出版は、西洋医学が実証的であることを人々に知らしめ、その後オランダ語の本格的な学習と、それを通じた西洋の学問「蘭学」が興隆するきっかけとなりました。

本草学から近代的博物学へ

江戸時代、医療に用いる薬品を研究する学問を「本草学」と呼びました。18世紀以降、幕府や諸藩のすすめた殖産興業政策によって、本草学は本来の薬品研究に加えて、有用な自然物についてその採集や栽培に必要な知識を得る博物学的研究が盛んになり、さらに小野蘭山(1729－1810)・宇田川榕庵(1798－1846)らの研究活動によって科学的博物学へと高められていきました。こうした本草学を生涯の仕事とした人物に、豊後高田出身の賀来飛霞(1816－94)がいます。飛霞は、蘭山亡きあと京都の本草学の中心的な指導者であった山本亡羊(1778－1859)に師事し、採薬のため全国各地を歩き、成果を『高千穂採薬記』・『日光採薬記』など多くの著書に残しました。彼が研究のため写生した植物図は、色彩をはじめ、花卉や種子の構造、葉脈や根の形態までが解剖学的にとらえて描かれ、科学的な分析が行われていることが分かります。



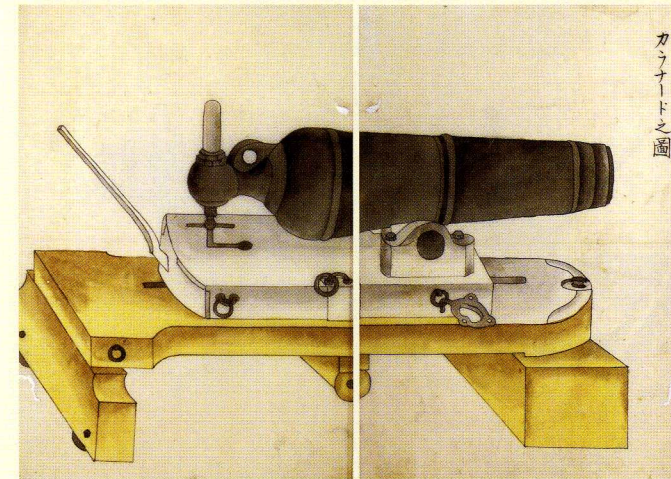
「解体新書」の解剖図

「蘭語譯撰」
中津藩が文化7年(1810)に出版した日蘭対訳辞書

賀来飛霞の植物写生図（ムカゴソウと楊梅図）

西洋軍事技術の導入

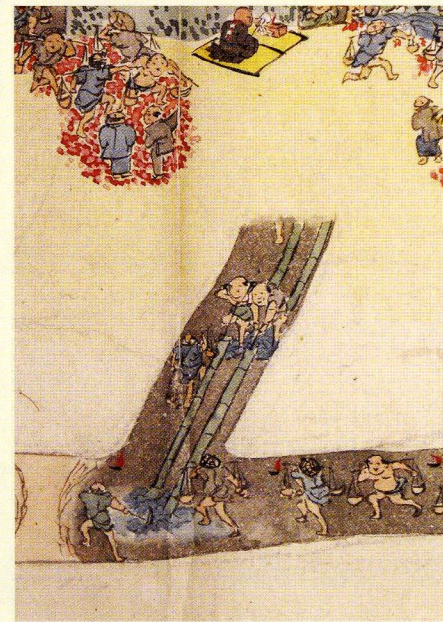
19世紀前半、外国船が日本に頻繁に来航し、海外の情勢が緊迫を増すなか、幕府は海防強化の必要に迫られました。天保11年(1840)アヘン戦争で清国敗戦の情報に触れた高島秋帆は、幕府に西洋式砲術の採用を進言し、老中水野忠邦の認可によって天保12年に江戸の徳丸ヶ原で西洋式大砲の実射演習を行いました。この演習は幕府によって一定の評価を得られ、秋帆の西洋式砲術はその後幕臣の江川英竜に伝授されました。また、松代藩佐久間家山から全国各地からやってきた武士たちにも教授され普及をみることになりました。こうした軍事科学にともなって西洋数学も導入されました。



西洋式大砲「カラナード砲」の図

江戸時代の土木技術

嘉永井路絵図は、水不足で悩む臼杵藩領の下宗方・八幡田村の村人たちが大分川から小野津留村を経て上宗方村の丘陵の下を通り下宗方村へ通じる井路（水路）工事を行った様子を描いたものです。工事は弘化3年(1846)11月に始められ、約1年半の歳月をかけ、嘉永元年(1846)5月に完成しました。上宗方村の丘陵の下を通すトンネル工事は、村人にとって難工事であったため、岡藩の尾平山から広右衛門・綱五郎の鉤山技術者2名を招いて進められました。この工事では、地下から湧き出る水を汲み出すため、モウソウ竹をくりぬいて作った「水ファイゴ」と呼ばれる、鉤山で一般に利用される揚水ポンプが使用されたことが分かります。

嘉永井路絵図
絵図に描かれている竹製の「水ファイゴ」『日本山海名物図会』
(宝暦4年・1754 初版)
図会に描かれている木製の「水ファイゴ」

からくり

江戸時代、機械や自動装置を「からくり」と呼びました。糸で操る単純なものから、ゼンマイや歯車を用いた複雑な仕掛けの人形などが作られ楽しまれました。江戸時代の科学と技術の結晶ともいえるべきその優れた技術は、当時の産業にあまり活かされることはありませんでした。

ねつけ
発火器付根付

現在のライターが仕込まれた根付。内部にバネが仕込まれており、側面のボタンを押すと火打ちがねが打ち下ろされて火種が作れるようになっている。

表紙について 『解体新書』扉絵

杉田玄白らによって出版された『解体新書』の扉絵で、男女二人の像はアダムとイブをかたどったものとみられています。ドイツ人クルムスの『ターヘル・アナトミア』（解剖図説）のオランダ語訳本を翻訳して出版された同書でしたが、扉絵にはスペインの医師のワルエルダの解剖書のものが採択され、図版には原本にはないトンミュス、ブランカールの解剖書の図が付け加えられるなど、出版にあたっては様々な西洋解剖書が参考にされました。なお、扉絵および図版は、平賀源内に西洋画を学び、後に「秋田蘭画」と呼ばれる独特な洋風画を確立した小田野直武が描いています。